

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：43502

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13316

研究課題名（和文）「戦争の記憶」のポピュラー・メディア文化史：シンガポールおよび香港の事例から

研究課題名（英文）Cultural History of 'War Memories' through Popular Media: Case Studies of Singapore and Hong Kong

研究代表者

松岡 昌和 (Matsuoka, Masakazu)

大月短期大学・経済科・助教

研究者番号：70769380

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、映画・音楽などの大衆メディアを取り上げ、第二次世界大戦と日本軍による南方占領、特にシンガポールと香港の経験がどのように描かれ、それが戦争の記憶にかかわる歴史経験にどのような影響を与えているのかについて調査・考察を行った。また、その過程で、日本占領期の大衆メディアの利用のさらなる調査や、戦後の「戦争の記憶」を形成した歴史教育や博物館などでの社会教育についても調査・分析の対照とした。その結果として、日本とアジア各地の記憶の齟齬のみならず、その「共犯」関係や、各地の歴史言説の特殊性についても浮き彫りになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、戦争と日本軍による東南アジアの占領という歴史的事実のみならず、映画や音楽といった大衆的なものも含むさまざまなメディアで戦争やそのもとでの生活経験がどのように表象され、集合的記憶を形成しているかについて考察を深めた。これは広い意味での史学史的研究と言えよう。歴史を単なる「事実」の蓄積としてだけ捉えるのではなく、その語られ方、大衆メディアを通じた人々の歴史実践、そして歴史を語る際の感情に着目した点で歴史研究の現代的意義をもつものと言えよう。また、研究成果は中等教育の現場や広い読者を持つ媒体へも反映させており、歴史・文化・地域の理解を広げていくうえで一定の意義を果たしたと言える。

研究成果の概要（英文）：This research project investigated and examined how popular media, such as films and music, depicted the Second World War and the Japanese military's occupation of Southeast Asia, particularly focusing on the experiences of Singapore and Hong Kong and how this affected historical experiences related to memories of the war. In the process, I also conducted further research into the use of popular media in the Japanese Occupation of Southeast Asia and also investigated and analysed post-war historical education and social education, including museums that shaped the "memories of war". As a result, this highlighted not only the discrepancies in the memories between Japan and various parts of Asia but also the "complicity" between Japan and these regions and the uniqueness of the historical discourse in each region.

研究分野：文化交流史

キーワード：戦争の記憶 第二次世界大戦 シンガポール 香港 アジア・太平洋戦争 アジア主義

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまでの研究で日本占領下シンガポールにおける文化政策・メディア政策の諸相を明らかにした。こうした研究成果を発表する中で、日本軍によるプロパガンダがシンガポールをはじめとする占領地で戦後どの程度どのような形で残ったのか、また日本軍のプロパガンダに協力した現地人「文化人」は戦後どのような評価を受けたのかといった点についてしばしば疑問が呈された。そこで、本研究では、終戦から 60 年代の香港とシンガポールに焦点を当てて、この問題に取り組むこととした。両都市は経済的に高度な自由を保持し日本を含む外来文化の影響を受けやすいという共通点を持っている。また、両者は華人ネットワークで結ばれており、アジアにおける文化的なネットワークを描き出して上で重要な研究対象になる。

近年、シンガポールにおいては戦後の社会や文化についての学問的な関心が高まっている。特に、2015 年にシンガポールが建国 50 周年を迎え、シンガポール社会の歴史についての調査が進んでいる。こうした動きは研究機関にとどまらず、在野の研究者による Singapore Heritage Society なども移民グループの歴史や生活空間の歴史などの調査に取り組み、その成果は広く市民の間で共有されている。隣国マレーシアでも 2017 年はマラヤ連邦結成 60 周年にあたり、これまでタブーとされていた歴史を明らかにする試みも進んでいる。近年両国で進む抗日戦争で中国を支援した南僑機工への再評価や、冷戦のなかで社会的に抹殺されたマラヤ共産党への関心は、そうした研究成果を反映している。日本においても、日本マレーシア学会が 2017 年 10 月にマラヤ独立 60 周年を記念したシンポジウムを企画し、マラヤ共産党について取材したドキュメンタリー映画「不即不離」を取り上げている。香港においても、今世紀に入り、アイデンティティをめぐる議論から、戦後史への関心が高まった。このように、戦後社会への学問的・社会的関心が高まる一方、戦時期との連続性や日本とのかかわりについては十分に検討されているとはいえない。そこで、本研究課題では人々の生活に密着したポピュラー・メディアを取り上げて戦争の記憶がどのように生成され、変容したのかについて取り上げ、その中でも大戦中の日本占領期との連続性や戦後の日本とのかかわりに注目する。

2. 研究の目的

本研究の開始当初、次のような目的を掲げた。本研究課題では、現地の「文化人」が戦時期に日本人と築いたネットワークがどの程度戦後まで継続し、どの程度断絶したのか、彼らが戦後になって「日本」「占領」「戦争」についてどういった言説を形成していったのかを明らかにする。それにより、第二次世界大戦後のシンガポールおよび香港における「戦争の記憶」の生成に関する新たな知見を示す。戦時期と戦後は、旧日本軍占領地において文化的にどの程度連続していたのか、これが本研究の「問い」である。戦時期と戦後の連続性については、これまで 1940 年体制論に代表されるように、政治学・経済学の分野では多く研究されてきたが、文化史の領域では研究の蓄積が少ない。特に、終戦によって「帝国」日本から切り離された旧「外地」と日本との文化交流史については、依然として戦時期の文化交流と、1980 年代以降の文化交流を切り離れた上での考察が一般的である。こうした議論では、一方で戦時期の文化交流を日本の「プロパガンダ」や「皇民化」として断罪する対象とし、他方 1980 年代以降の日本文化のアジア地域への浸透を「クールジャパン」に代表される「ソフトパワー」戦略の前史として捉えている。本研究は、第一義的にはこれまでの映画研究などでなされた先行研究の蓄積の上に新たな事例を提供するものであるが、同時に、香港、シンガポールの双方を扱うことで、両者の関係を考察することや、両者を比較することでそれぞれの特殊性を浮き彫りにすることが可能となる。本研究の独自性および創造性は戦中・戦後を「断絶」とする見解を批判的に検討し、また比較史の観点をこれらの地域の文化史・メディア史に取り入れたことにある。

本研究課題の開始後、研究代表者が他の研究プロジェクト、特に科学研究費助成事業基盤研究(B)「貫戦期における日中映画の越境と協働をめぐる総合的研究」に研究分担者として参加し、そこでの研究課題を遂行するなかで新たな知見を得ることができ、当初の研究目的に加えて新たな問いを設定した。それは、「貫戦期」という時代区分を設定することで、それが日本のアジア関与や戦争観をどう規定し、その最後の段階においていかなる変化を大衆的な想像力のなかにもたらしたのか。また、そうしたアジア観・戦争観の変化はアジア地域の国家建設や日本との外交関係のなかでどのように機能したのか、という点である。扱う素材そのものについては、特段の変化はないものの、着眼点を増やすことにより、ポピュラー・メディアを通じた人々の歴史実践や、戦争の記憶を巡る感情の齟齬といった新たな視点を取り入れることができた。

3. 研究の方法

戦争の記憶にかかわる歴史的研究を行うにあたり、主たる研究方法としては、国内外の史資料を収集し、検討することである。国内については、国立国会図書館、立教大学図書館、一橋大学附属図書館、NHK 放送文化研究所のほか、愛知・名古屋 戦争に関する資料館など関連する地域の施設も訪問し、資料を参照した。国外については、当初本研究課題では、イギリス、オランダ、香港、シンガポールでの資料調査を計画したが、COVID-19 の世界的流行による影響でその不首

尾や遅れが生じた。2019 年度に香港大学図書館、香港電影資料館、香港歴史博物館における調査を行った後、2023 年度になりイギリス国立公文書館、シンガポール国立図書館、シンガポール国立大学中央図書館、シンガポール旧フォード工場展示室、シンガポール国立博物館における調査を行うことができた。オランダの資料については、映像資料がオランダ視聴覚研究所によってオンライン公開が進んでおり、それを参照した。COVID-19 の世界的流行は国際的な研究会議や遠方の研究者との意見交換などにおけるオンライン化を推し進めた側面があり、本研究もその恩恵に浴した点を記しておきたい。一方で、香港では 2020 年に国家安全維持法が施行され、歴史研究における調査がこれまで同様の形式で行いにくくなった点も指摘しておきたい。

4. 研究成果

本課題の研究期間中に COVID-19 の世界的な流行を経験し、国外での資料調査や海外の研究者との対面による交流を含めた研究活動の一部が制限されることになった。そうした状況の中にもありながらも、国内の資料の利活用やオンラインでの学術活動を通じて研究を進展させ、特に戦時期から 1960 年代にかけての大衆メディアにみられる戦争の表象や戦争の記憶を巡る各地の政治的動きについて成果を公開することができた。また、本課題の研究機関は、新たな高等学校学習指導要領の施行の時期にあたり、本研究の成果を中等教育に還元する活動についても成果を上げることができた。以下、年度ごとの成果について記述する。

(1) 2019 年度

2019 年度は、まず研究課題に関連するテーマについて、これまで調査・整理を行ってきた内容を論文の形で発表した。倉田徹編『香港の過去・現在・未来』(勉誠出版)所収の論文「リー・クアンユーの目に映る香港」では、シンガポール初代首相で戦後アジア政治に大きな影響力を行使してきたリー・クアンユーの香港についてのスピーチやインタビューを整理した。本論文は、直接的にポピュラー・メディアについて分析していないものの、その研究の前提となる、政治的背景について明らかにしたものと言える。

これまでの研究に基づく学会発表として、2019 年 6 月に一橋大学大学院言語社会研究科韓国学研究中心と延世大学近代韓国学研究所共催のシンポジウム「人文学研究の知的基盤省察と東アジア学 - 近代学問と知識人 - 」では戦時期日本から東南アジアに渡った文化人によるプロパガンダ活動について、2019 年 7 月にはバンコクで開催された AAS-in-Asia Conference では、日本占領下香港における映画のレパートリーについて、2019 年 11 月に立命館アジア太平洋大学で開催された 17th Asia Pacific Conference では、シンガポールにおける戦後史表象についての発表などを行い、国内外の研究者との意見交換を行った。

新たな資料の調査については、2019 年 8 月に香港を訪問し、香港大学図書館や香港電影資料館などにおいて、戦後香港におけるメディアについての基礎的な資料を入手した。また、現地の歴史研究者と戦跡や香港歴史博物館を訪問し、香港における戦争の記憶についての現状を調査したほか、当該領域の研究動向についての意見交換を行った。香港での調査では、本研究の重要な先行研究となる刊行物も入手することができ、それらの整理を継続した。そのほか、国内においても資料調査を進め、成果の発信に向けた準備を行った。

(2) 2020 年度

2020 年度は、COVID-19 の世界的な流行により、研究のフィールドとなるシンガポールおよび香港、さらに調査先として本課題で計画していたイギリスやアメリカ合衆国への訪問がいずれも不可能となり、これまでに収集した資料に基づく研究結果の公表に重点をおいた。

まず、シンガポールに関しては、1960 年代にシンガポールを舞台として制作された日本映画『シンガポールの夜は更けて』について、その作品の内容、登場人物の表象、その背景となる国際政治と汎アジア主義をめぐる議論を、2021 年 1 月にオンラインで開催された EAPCA II Conference にて行った。これについては論文としてまとめ、日本語および英語で公表する準備を進めた。また、これに関連し、戦間期から戦後にかけてのシンガポールにおける大衆文化と政治文化との関わりについて、歴史教育への研究成果の応用という観点から、近年の東南アジア研究やシンガポールにおける歴史研究をまとめる形で、2020 年 10 月に「歴史学会第 3 回歴史総合シンポジウム:「国際秩序の変化や大衆化」の論じ方 1910 年代から 50 年代の世界」において報告を行った。これについても論文化を進めた。そのほか、2021 年 3 月には、これまで行ってきた日本占領下シンガポールでの映画上映についての研究を整理し新たな知見を付け加える形で AAS 2021 Conference における報告を行った。

香港については、2019 年に行った香港歴史博物館の展示についての分析と整理を進めた。その一部は、立教大学アジア地域研究所の機関誌『なじま』にエッセイとして発表した。日本占領期の展示に関わる具体的な分析については、論文化を進めた。

(3) 2021 年度

2021 年度は、前年度に引き続き COVID-19 の世界的な流行により、国外での調査を行うことができなかった。そこで、先行研究の分析と前年に引き続きこれまでに収集した資料に基づく研究結果の公表に重点をおいた。

まず、2020 年度より進めてきた 1960 年代の日本映画『シンガポールの夜は更けて』(松竹)

について、汎アジア主義との関連を軸にした英文の論文を執筆し、イギリスの学術雑誌に投稿した、これについては、2021年8月にEuropean Association for Japanese Studies Conferenceでも報告を行い、ここで受けた指摘ならびに当該論文の査読で受けた修正意見に基づき、修正作業を進めた。この作品については、上述の論文とは別に、作品中の女性表象について戦時期からの連続性を指摘した議論を2021年7月にInter-Asia Cultural Studies Society Conferenceで報告を行い、論文文化に向けた検討を始めた。

香港については、2019年に行った香港歴史博物館の展示についての分析を論文としてまとめ、野世英水・加藤斗規編『近代東アジアと日本文化』(2021年10月)所収論文として刊行した。

そのほか、これまで行ってきた日本占領下シンガポールでの「桃太郎」の利用についての研究に新たな知見を付け加え、泉水英計編『近代国家と植民地性：アジア太平洋地域の歴史的展開』(2022年3月)所収論文として刊行した。

これらに加え、歴史教育への研究成果の応用という観点から、歴史学会編『歴史総合：世界と日本』(2022年3月)に「大衆文化の展開は世界にどのようなインパクトをもたらしたか」、「グローバル化と私たち テクノロジーと移動の進展」、「新興独立国はどのようにして国家建設と開発をなしとげていったのか」の三編を執筆・出版した。

(4) 2022 年度

2022年度は、戦後における日本とシンガポールとの文化的な関わり、さらにそこに見られる戦争の記憶についての論考の執筆と調査を進めた。

シンガポールについては、1967年に公開された松竹制作の映画『シンガポールの夜は更けて』についての考察を進め、まず作中にみられるアジア主義的側面と、その戦後における展開について分析を行った。それをまとめた論考が英文の雑誌 East Asian Journal of Popular Culture に掲載された。

また、日本における大衆オリエンタリズムとアジア主義の観点から、戦時期の日本における東南アジア民衆像について検討を行った。その成果は『植民地教育史研究年報』第25号に掲載された。

そのほか、これまでの研究のアウトリーチとして、2023年1月に高等学校の研修事前講座として、シンガポールにおける日本占領の経験について東京都立小石川中等教育学校において講演を行った。そこでは、報告者のこれまでの研究を踏まえ、日本におけるシンガポール表象とシンガポールにおける戦争の記憶を対照させ、日本と東南アジアとの関わりについて多様な視点を提供した。実施後、当該学校より生徒の感想文を受け取ったが、高校生に日本の東南アジア関与の歴史について新たな知識を提供することができたと言える。

(5) 2023 年度

本研究課題は当初2022年度での終了を予定していたが、COVID-19に伴う調査の不首尾などもあり、1年間の延長を行った。2023年度は、国内での資料調査に加え、これまでCOVID-19によるパンデミックで中断していた国外での資料調査や国際的な学会会議への参加、国外研究者との対面による聞き取りおよび打ち合わせなどを再開した。国内での調査としては、NHK放送文化研究所に所蔵されている資料の調査を中心にを行い、その成果の一部は、2023年8月に開催されたヨーロッパ日本研究学会(EAJS)や2023年12月に開催された東南アジア日本研究学会(JSA-ASEAN)において発表し、多くの海外研究者より関心を向けられたとともに、その修正の可能性についても指摘があった。これについては論文文化を進めた。

国外での資料調査および国外研究者との協働としては、2023年8月~9月にイギリスを中心としたヨーロッパ各国で資料調査を行い、主に植民地関係資料にみられる放送やメディア政策について確認することができた。これらについては、国内資料との照合を進めた。国際的な学会会議への参加および対面による研究者への聞き取り・打ち合わせについては、前述の学会会議のほか、2023年9月には日本の研究機関に所属する複数の研究者とともにプリストル大学香港史研究センターを訪問し、今後の共同研究の可能性について議論するとともに、これまでの研究の動向について共有することができた。プリストル大学の研究者とは、2022年2月に立教大学で開催された研究集会「香港史と感情史」にコメンテーターとして参加し、特にAllan Pang氏による歴史教科書についての研究報告について討論を行った。

加えて、研究のアウトリーチとして2023年10~11月に東京都立小石川中等教育学校において、高等学校の研修事前講座として、シンガポールにおける日本占領の経験についての講演およびオンライン学習会を行った。

以上のほか、当該年度に取り組んだ研究活動として、マレーシア出身の作家Vanessa Chanが執筆した小説The Storm We Madeの日本語訳(邦題:『わたしたちが起こした嵐』)出版にあたっての解説を執筆したほか、シンガポールで新たに導入されたシラバスに基づく中等学校歴史教科書の分析についての論文執筆がある。前者については、歴史研究者の立場から、記憶の物語として当該作品を読み解く試みを行い、2024年6月に同作品日本語訳の一部として出版された。また、後者については、研究代表者が参加する科学研究費助成事業基盤研究(C)「歴史学習・遠隔協働学習を通じた平和共存のための日本語教育研究」とも協働し、論文集の一部としての出版準備を進めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Matsuoka Masakazu	4. 巻 9
2. 論文標題 Japan's memory of war and imperialism in kayo eiga: Shochiku's Under the Stars of Singapore and Asianism	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 East Asian Journal of Popular Culture	6. 最初と最後の頁 9-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1386/eapc_00086_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡昌和	4. 巻 25
2. 論文標題 「東南アジア民衆像」の論点 アジア主義と劣等感のあいだ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 植民地教育史研究年報	6. 最初と最後の頁 40-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡昌和	4. 巻 新89
2. 論文標題 東南アジアの植民地における大衆文化と多様なナショナリズム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 思潮	6. 最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林茂子, 清水知子, 宮脇弘幸, 松岡昌和	4. 巻 23
2. 論文標題 南洋群島・南方占領地の教育研究動向とその背景	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 植民地教育史研究年報	6. 最初と最後の頁 14-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 MATSUOKA, Masakazu
2. 発表標題 Screening of Japanese Films in Japanese-occupied Singapore
3. 学会等名 Workshop on Memories and Politics: the Japanese Occupation of Singapore on Screen (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松岡昌和
2. 発表標題 高等学校地理歴史科教科書に見られる日本の東南アジア占領
3. 学会等名 JSA-ASEAN 7th Biennale International e-Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松岡昌和
2. 発表標題 戦後日本映画に見られる南方占領の記憶
3. 学会等名 20世紀メディア研究所第151回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 MATSUOKA, Masakazu
2. 発表標題 A whitewashed memory of the occupation of Southeast Asia in post-war Japanese popular media
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 MATSUOKA, Masakazu
2. 発表標題 The Representation of a Chinese Woman in a Post-war Japanese Film Under the Stars of Singapore (1967)
3. 学会等名 IACSS Conference 2021 Singapore (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 MATSUOKA, Masakazu
2. 発表標題 Film and Japanese Cultural Policies in Wartime Singapore
3. 学会等名 AAS 2021 Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 MATSUOKA, Masakazu
2. 発表標題 Singing Exotism, Sanitizing Imperialism: Japan's Memory of the Occupation of Southeast Asia in Under the Stars of Singapore
3. 学会等名 2nd East Asian Popular Culture Association Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松岡昌和
2. 発表標題 アジアの植民地における大衆文化と国際秩序変化への対応
3. 学会等名 歴史学会第3回歴史総合シンポジウム：「国際秩序の変化や大衆化」の論じ方 1910年代から50年代の世界（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 MATSUOKA, Masakazu
2. 発表標題 Memories of Postwar Reconstruction in Singapore
3. 学会等名 17th Asia Pacific Conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MATSUOKA, Masakazu
2. 発表標題 Films in Hong Kong under Japanese Occupation
3. 学会等名 AAS-in-Asia 2019 Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡昌和
2. 発表標題 戦争とプロパガンダ
3. 学会等名 人文学研究の知的基盤省察と東アジア学 - 近代学問と知識人 - (一橋大学大学院言語社会研究科韓国学研究センター、延世大学近代韓国学研究所) (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 泉水英計編 松岡昌和分担執筆	4. 発行年 2022年
2. 出版社 御茶の水書房	5. 総ページ数 356
3. 書名 近代国家と植民地性：アジア太平洋地域の歴史的展開	

1. 著者名 歴史学会編 松岡昌和分担執筆	4. 発行年 2022年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 「歴史総合」世界と日本：激変する地球人類の未来を読み解く	

1. 著者名 野世英水，加藤斗規編 松岡昌和分担執筆	4. 発行年 2021年
2. 出版社 銀河書籍	5. 総ページ数 610
3. 書名 近代東アジアと日本文化	

1. 著者名 倉田徹、曾根康雄、廣江倫子、澤田ゆかり、福田円、松岡昌和、塩出浩和、岩間一弘、倉田明子、古泉達矢、岸佳央理、吉川雅之、村井寛志、張イクマン、阿部香織、小堀慎悟、瀬尾光平、小栗宏太、萩原隆太	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 香港の過去・現在・未来	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------